

トップの形で変わる!

# 「飛ばす」「曲げない」 「再現性を高める」 ドライバー swings

swings はトップの形によって大きく変わる。  
その違いと効果を男子ツアーのトッププロの  
ドライバー swings を参考に解説。  
求める swings や弾道が打てるトップが見つかるぞ!

写真=ゲリー小林



星野陸也  
Rikuya Hoshino



稲森佑貴  
Yuki Hamori



大槻智春  
Tomoharu Otsuki

プロのトップも  
いろいろで  
それぞれに長所があります!



解説=赤坂友昭

●あかさか・ともあき / 1985年生まれ、福岡県出身。選手として活動後、ゴルフコーチに転向。クラブ力学、物理学、運動力学を日々追求。東京三鷹市の東京ゴルフスタジオ、新宿のトータルゴルフフィットネスにて、プロ、アマチュア、ジュニアと多くのゴルファーのレッスン活動を行っている。

# 星野陸也

●ほしの・りくや/1996年生まれ、茨城県出身。186cm。76kg。20年はフジサンケイクラシックで優勝、21年も関西オープン、アジアパシフィックダイヤモンドカップで優勝するなど絶好調。ツアー通算5勝。フリー。



Rikuya Hoshino

シャフトクロスしても  
体を開かずに打つ

飛ばし屋の星野選手の特徴的なところは、トップでのシャフトクロス(3)(4)。最近クラブをシャローに振る選手が多く、トップでシャフトがクロスするのは男子プロでは珍しいタイプです。しかも、ヘッドが肩から見えるほどのオーバースイングでもあります。

インパクトは、アマチュアの場合、インパクトのタイミングが合わずに曲がる原因になりがちですが、じつはダウンスイングで大きなタメを作りやすくなるので、飛距離を出したい人にはもってこいのスイングなのです。

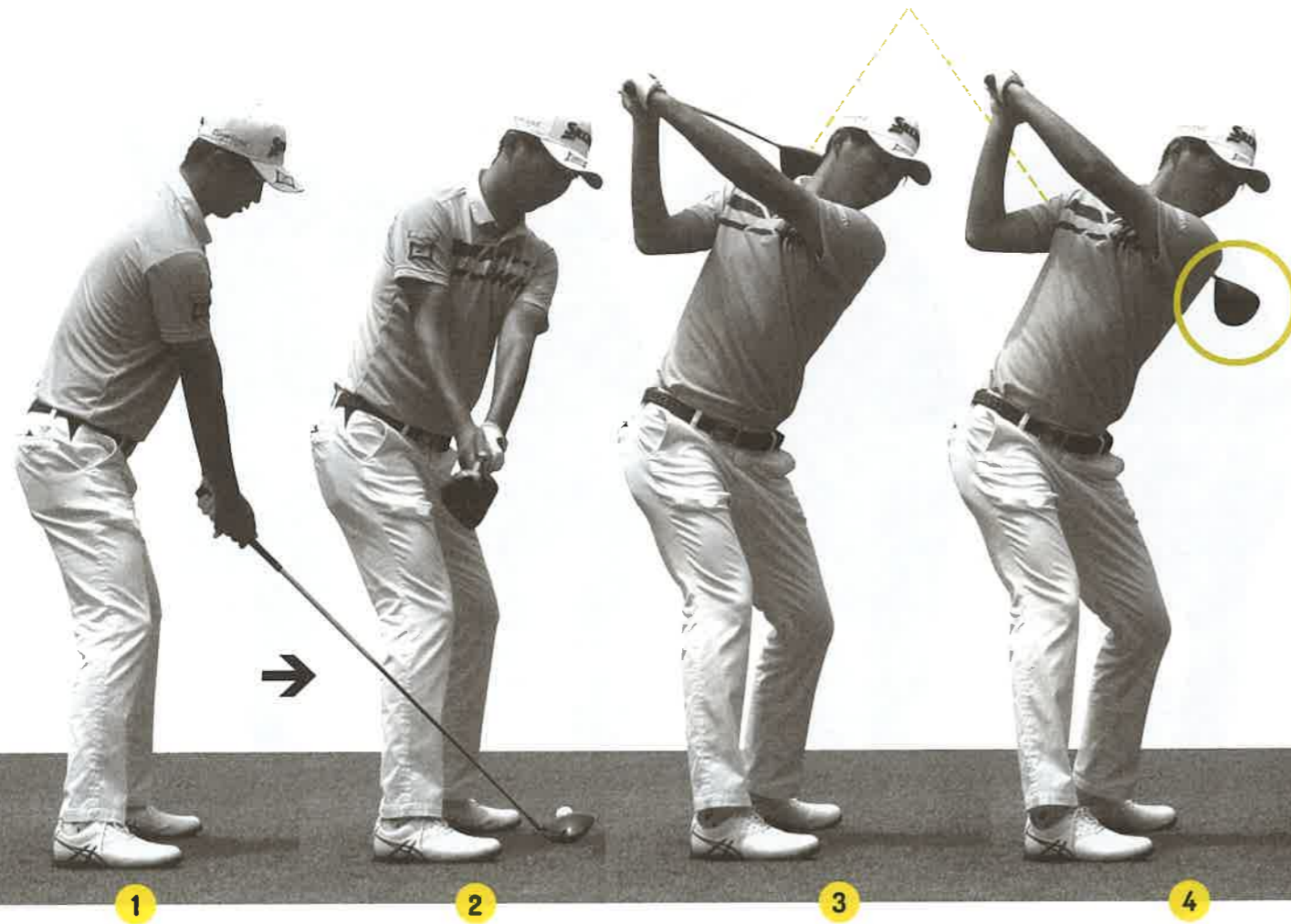
そもそも、シャフトクロスには良性と悪性があります。シャフトがクロスすると、ダウンスイングでクラブが外から下りてきやすく、これが悪性でアマチュアに多いパターン。星野選手のように、インサイドからクラブを下ろせるのが良性的のシャフトクロスです。インサイドから下ろせるシャフトクロスをマネしたいものですが、そのポイントはインパクトに向かって体を開かないこと。インパクトで肩のラインを飛球線と平行にしてください(6)。そうすると、シャフトクロス+オーバースイングになっても、インパクトで上半身が流れません。タイミングのズレも起こりにくいので、ボールをしっかりミートできます。

## トップ→シャフトクロス

# オーバースイングで タメを作って飛ばす

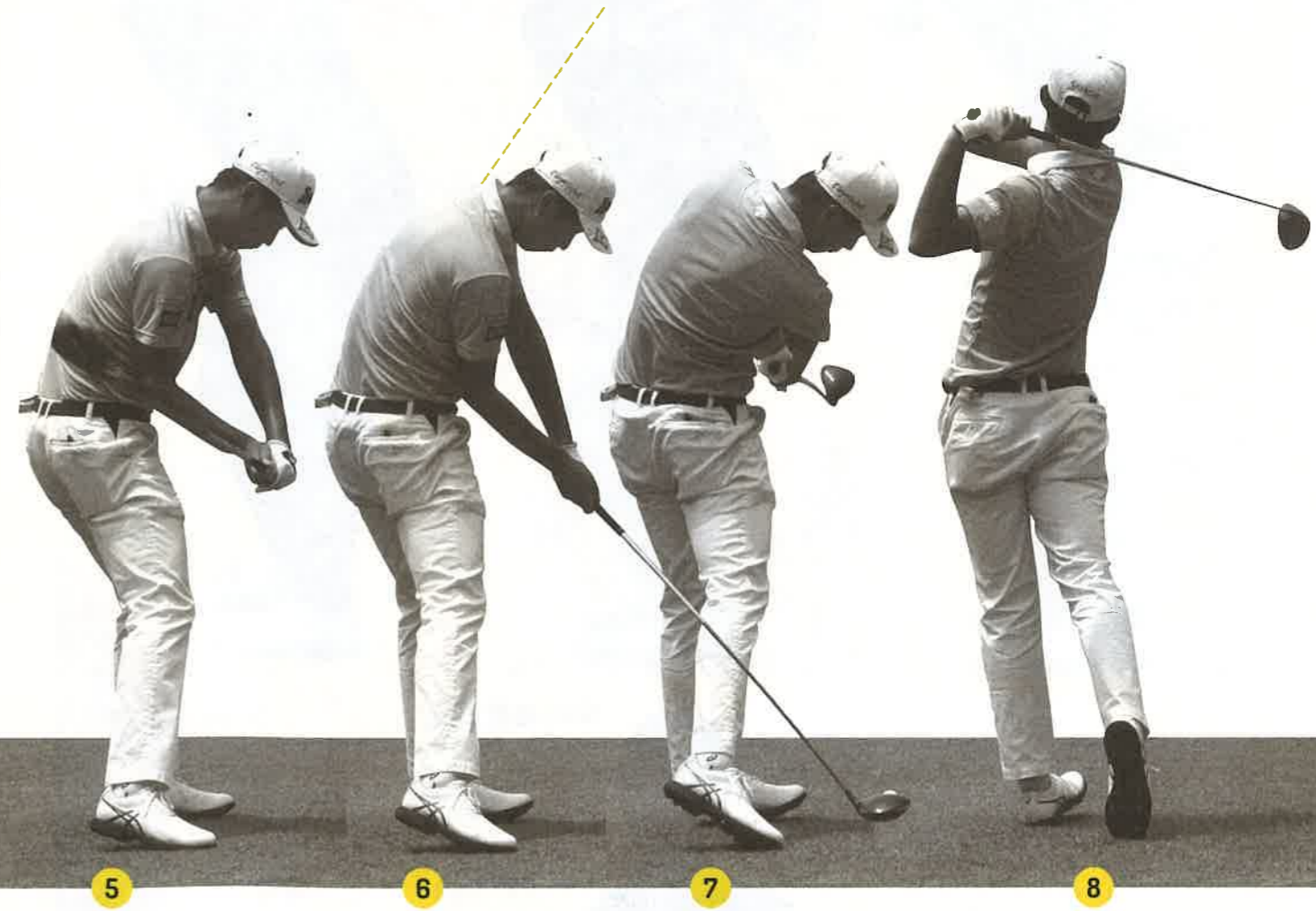
Point

シャフトクロス+  
オーバースイングは  
ダウンでタメを作りやすい



Point

下半身リードで回転すれば  
上半身が遅れて回るので  
肩の開きが抑えられる



# 稲森佑貴

●いなもり・ゆうき/1994年生まれ、鹿児島県出身。169cm、68kg。20年は日本オープンで優勝、ダンロップフェニックスでは3位タイに入った。FWキープ率は15年から19年まで1位。20-21年シーズンも1位をキープしている曲がらない男。フリー。



Yuki Inamori

## 手元を浮かさず低い位置でインパクト

とにかく曲がらないことで有名な稲森選手。ご本人も何かのインタビューで「曲がらないのはフェースローテーションをしないから」といつていました。その言葉のとおり、稲森選手は右の手のひらとフェース向きをリンクさせた、シンプルなスイングで曲がりを防いでいます。まず①のアドレスでは、右の

手のひらとフェース向きをリンクさせるために、ウィークグリップで握っています。ハーフウェイバック(②)で、前傾角とフェースの角度がほぼ同じになっているのもフェースローテーションをしない証拠。そして重要なのが、シャフトが飛球線と平行になるコンパクトなトップです(③)。コンパクトなトップは、ダウンスイングでもスイングプレーンをなぞりやすく、フェース向きも変わりにくくなる。そして、④⑤のゾーンでは、手元を浮かさずに低い形でインパクトできます。

インパクトは手をアドレス時の位置に戻すことが理想ですが、手元が高く浮くのは百害あって一利なし。コンパクトなトップは体が浮きにくくなるのもメリットで、体が浮かなければ手元も浮かなくなりやすくなります。アドレスよりも前傾を深くするイメージをもってインパクトするのもOKですよ。

### トップ→シャフトが飛球線と平行

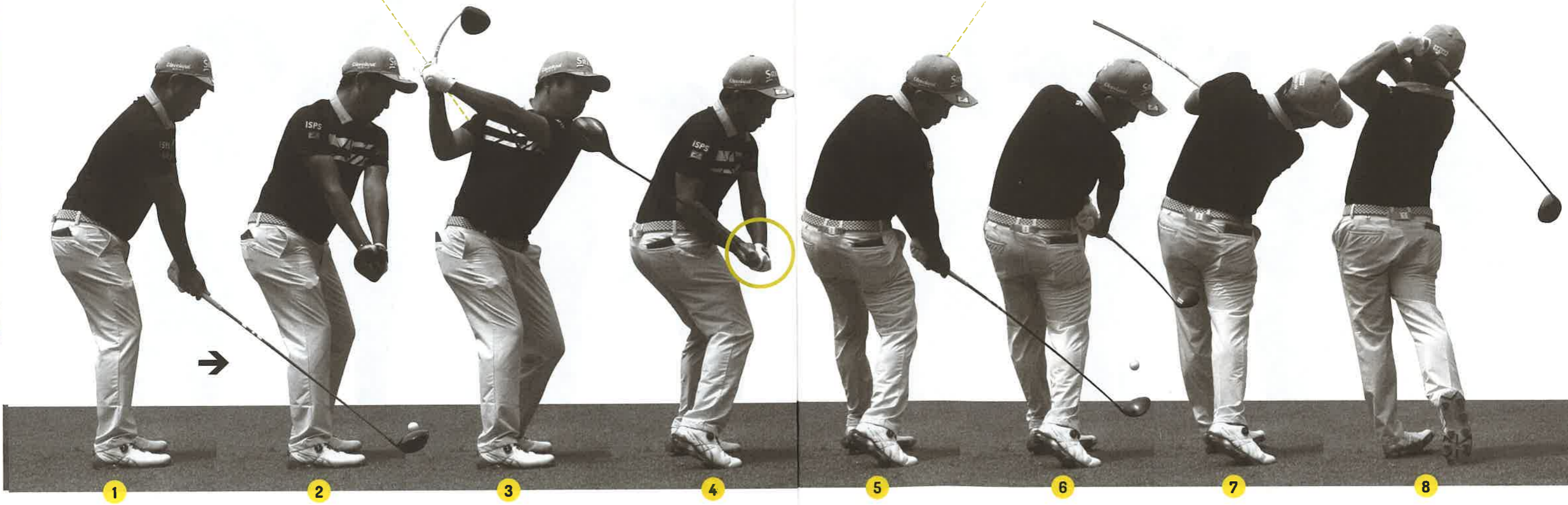
# 方向性重視のコンパクトスイング

Point

低めのコンパクトなトップにするとダウンでムダな動きを抑えられる

Point

手元を低くするにはフォローを低く左に振り抜くイメージをもつのも有効



# 大槻智春

●おおつき・ともはる／1990年生まれ、茨城県出身。172cm、94kg。20年は三井住友VISA太平洋マスターズ7位タイ、ダンロップフェニックス3位タイ、ゴルフ日本シリーズJTカップ2位タイと、何度も優勝争いに加わる活躍を見せた。真清創設所属。



レイドオフでも飛距離を高めている

大槻選手は、今流行りのシャローイングのスイング。トップは、ダウンスイングでシャローイングの動きを作りやすいレイドオフの形です(④)。レイドオフとは、シャフトの向きが飛球線より左を向くトップですが、その特徴はスイングプレーン上にクラブを下ろしやすいこと。アドレスしたときのクラブの延

長線上にトップがくるので、シンブルに下ろすだけでプレーンをなぞることができる再現性の高さがメリットです。  
レイドオフのトップは「飛距離が出にくい」という短所もあるのですが、大槻選手は腕の位置を高くしてハイトップを作り、パシブトルクという手首のタメを利かせることで飛ばしのエネルギーを作り出しています。そこからダウンスイングはクラブをシャローに下ろして、インサイドからボールをとらえる(④⑤)。⑥のインパクト後を見ていると、頭をすく後方に残っていますが、こうすると遠心力とクラブと体が引っぱり合う力が生まれるので、回転エネルギーが大きくなるのです。フォロイーで腕が伸び、ハイフィンッシュをとるのも特徴的ですが、これは引っぱり合うようにスイングした結果。ミート率が上がる再現性の高さと遠くへ飛ばす飛距離も兼ね備えたトップからフィニッシュなので、ぜひマネしてみてください。

Tomoharu Otsuki

## トップ→レイドオフ

# 再現性が高まり、ミート率アップ!

Point

ミートしやすいレイドオフでもトップの位置を高くすることで飛ばしのエネルギーを作り出す

Point

頭を後方に残してクラブヘッドと引っぱり合う形も飛ばしにつながるポイント

